

翻 訳

よこしまな女（開幕劇）

J・ロンドン作
辻井榮滋訳&ノート

舞台…カリフォルニア。

時…ある夏の日の午後。

登場人物

ロレッタ——^{かれん}可憐な若い娘。ひじょうに^{むく}無垢。19歳ぐらい。すらりとして、きゃしゃでひ弱な花。純真。

ネッド・バッシュフォード——世間ずれした若者で、自分のこれまでの経験を哲学的に考察するが、女性の誠実さや清浄さといったことには信頼を置いていない。

ビリー・マーシュ——田舎の町の若者で、ロレッタ同様無垢。無器用。前向き。未熟な青二才。

アリス・ヘミングウェイ——社交界に出入りしている女性。寛大で、男女を結びつける存在。

ジャック・ヘミングウェイ——アリスの夫。

お手伝い。

よこしまな女

〔カリフォルニアの田舎の家の普通の居間で幕が上がる。サンタ・クレアラのヘミングウェイ家。部屋は、後方中央に立派な石の暖炉が目につく。暖炉の両側には、大きなダイヤモンド・ガラスの窓がある。左右には、カーテンを締めた幅の広い戸口がある。正面左手には、テーブルがあって、花を挿した花瓶と、何脚かの椅子がある。正面右手には、グランド・ピアノがある。〕

〔幕が開くと、ロレッタがピアノのところに腰かけている。弾いてはおらず、ピアノには背を向けて、ネッド・バッシュフォードに向きあっている。〕

ロレッタ：〔不機嫌に、1枚の楽譜であおぎながら。〕だめ、私は魚釣りになんか行かないわ。あったかすぎるもの。とにかく、魚釣りにならないでしょ。それに、魚だって午後のこんなに早くから食いつかないでしょ。

ネッド：何言ってるんだよ。全然暖かくなんかないよ。どうせ、魚なんか釣れっこないだろうし。話したいこともあるんだ。

ロレッタ：〔相変わらず不機嫌に。〕いつだって話したいことがあるってばかり。

ネッド：ああ、でも面白半分にだけだよ。今回は違う。まじめなんだ。2人の……僕の幸せは、そのことにかかっているんだ。

ロレッタ：〔話し方も意気こんで、もう不機嫌ではなく、真剣でうれしそうで、プロポーズを見抜いているようだ。〕

ネッド：〔脅すようにと言ってもいいぐらいに。〕いいかい？

ロレッタ：〔興味をそそるように。〕ええ。

〔ネッドは、邪魔されるのを恐れるかのように心配そうにあたりを見まわして、咳ばらいをしようと、覚悟を決めて、ロレッタの手を取る。〕

〔ロレッタはハッと驚き、臆病になるが、それでも彼に対する自分の愛を純真に隠しきれずに、いそいそと耳を傾けようとする。〕

ネッド：〔もの優しい口調で。〕ロレッタ……僕は、……君と出会った時からずっと――

〔ジャック・ヘミングウェイが、左側の戸口に現われ、ちょうど入ろうとするところだった。〕

〔ネッドは、突然ロレッタの手をおろす。怒りをあらわにする。〕

〔ロレッタは、中断に失望の色を見せる。〕

ネッド：ちくしょう。

ロレッタ：〔ショックを受けて。〕ネッド！なぜそんなふうに悪態をつこうとするの？

ネッド：〔不機嫌に。〕悪態じゃないよ。

ロレッタ：何なの、ねえ？

ネッド：不愉快なのさ。

ジャック・ヘミングウェイ：〔舞台を右のほうへと渡っていきながら。〕またいがみ合いかい？

ロレッタ：〔ぶんぶんしながら、もったいぶって。〕そうじゃないわ。

ネッド：〔無愛想に。〕今度は何のご用？

ジャック・ヘミングウェイ：〔ひじょうに熱心に。〕魚釣りに行こうよ。

ネッド：〔勢いよく。〕いや、暖かすぎるよ。

ジャック・ヘミングウェイ：〔あきらめて、右へ出ていこうとする。〕声を荒げなくたっていいよ。

ロレッタ：魚釣りに行きたいのだと思ったわ。

ネッド：ジャックとじゃないよ。

ロレッタ：〔非難するように、勢いよく煽りながら。〕でも、全然暖かくないって言ったでしょ。

ネッド：〔もの優しく。〕そんなこと君に言いたかったことじゃないんだよ、ロレッタ。〔彼女の手を取る。〕ねえ、ロレッター

〔突然、アリス・ヘミングウェイが右手から入ってくる。〕

〔ロレッタは、急に手をぐいと動かし、とまどった顔つきをする。〕

〔ネッドは、見苦しくないように努める。〕

アリス・ヘミングウェイ：まあ！ 2人とも釣りに行ったんだと思ったわ！

ロレッタ：〔にこやかに。〕何かご用、アリス？

ネッド：〔礼儀正しくしようと。〕僕にできることなら何でも？

アリス・ヘミングウェイ：〔口^{くちばや}早に、しかも退出しようとして。〕いえ、違うの。郵便物が届いてるか見にきただけなのよ。

ロレッタとネッド

〔2人いっしょに。〕いえ、届いてませんよ。

ロレッタ：〔急に右のドアのほうへ進みだして。〕私、見てくるわ。

〔ネッドは、うらめしそうに彼女を見る。〕

〔ロレッタは、じらすように戸口からふり返って、姿を消す。〕

〔ネッドは、胸くそを悪くしながらモリス式肘^{ひじ}かけ椅子に身を投げかける。〕

アリス・ヘミングウェイ：〔近寄って、ネッドの正面に立つ。責めるような口調で。〕彼女に何て言ってたの？

ネッド：〔不機嫌に。〕何も。

アリス・ヘミングウェイ：〔脅かすように。〕さあ、私の言うことを聞きなさい、ネッド。

ネッド：〔まじめに。〕誓って、アリス。彼女に何も言ってやしませんよ。

アリス・ヘミングウェイ：〔急に態度を変えて。〕でも、きっと彼女に何か言ってたはずよ。

ネッド：〔いら立たしげに。彼女のために椅子を取って、すわらせ、自分もまたすわって。〕ねえ、アリス。僕にはあなたのたくらみがわかってるんだ。あなたは、僕を馬鹿にするためにここへ招いたんだ。

アリス・ヘミングウェイ：そんなことじゃないのですよ。来てもらったのは、気立ての優しい汚れのない若い女性…この世で一番気立ての優しい汚れのない女性に出会ってもらうためよ。

ネッド：〔冷淡に。〕そんなふうに手紙で言っていましたね。

アリス・ヘミングウェイ：だから、来たのでしょ。ジャックは、1年間あなたを来させようと骨折ってきたわ。

ネッド：もし僕が会ったこともない女性についての手紙の1行のためにやって来たとあなたが思うのだったら—

アリス・ヘミングウェイ：〔からかって。〕もはや女性……若い女性に興味をなくした，あわれな世間ずれしてやつれた男！ 女性の良さをすっかり信用できなくなってしまった哀れでくたびれた悲観論者—

ネッド：それは，あなたの責任だ。

アリス・ヘミングウェイ：〔疑うように。〕私ですって？

ネッド：あなたの責任です。なぜ僕を見捨てて，ジャックと結婚したのですか？

アリス・ヘミングウェイ：知りたいの？

ネッド：そうです。

アリス・ヘミングウェイ：〔賢明に。〕まず，あなたのことを愛していなかったから。次に，あなただっただけ私のことを愛していなかったから。〔彼女は，彼の異議を唱えそうな手と，同様の顔の表情を見て，ほほえむ。〕それから3つめに，あの時にはあなたが愛していた，というか愛していると思っていた女性が27人ぐらいいたからよ。だから，ジャックと結婚したの。そして，そんなわけで，あなたは女性の良さが信用できなくなったの。自分だけ責めればいいの。

ネッド：〔感心しながら。〕えらく説得力のある言い方だね。聴きながら，もうちょっとで信じてしまうほどだ。それでも，あなたが他の女性と同じだということ，いつだってわかっているよ…当てにならないし，正直でないし，それに……

〔ネッドはアリスをにらみつけるが，それ以上は言わない。〕

アリス・ヘミングウェイ：続けてよ。こわくないわ。

ネッド：〔きっぱりと。〕それにふしだらだ。

アリス・ヘミングウェイ：まあ！ この人でなし！

ネッド：〔さも満足そうに。〕その通り。怒ればいい。よければ家具を壊したっていい。かまやしないよ。

アリス・ヘミングウェイ：〔急に態度が変わって、穏やかに。〕それじゃ、ロレッタはどうなの？

〔ネッドは、あえぐが黙ったまま。〕

アリス・ヘミングウェイ：あのかわいくあどけない見かけの裏に潜んでいるにちがいない不誠実の深み……あなたの主義によればね！

ネッド：〔まじめに。〕ロレッタは例外だ、正直言って。彼女は、あなたが手紙で言った通りだ。小さな妖精、天使のような人だ。彼女のような人を夢にも思わなかった。こんな時代にあんな女性を見つけるなんて、驚くべきことだ。

アリス・ヘミングウェイ：〔薦めるように。〕あの子は、とてもうぶ^{ナイーヴ}だわ。

ネッド：〔誘いに乗って。〕そう、その通りだね。顔にしたって舌にしたって、彼女の秘密をみんなのぞかせてる。

アリス・ヘミングウェイ：〔うなずきながら。〕そう、私だって気づいてたわ。

ネッド：〔喜んで。〕そうなの？

アリス・ヘミングウェイ：彼女は何も隠せないわ。彼女があなたのこと愛しているのをわかってるの？

ネッド：〔罨^{わな}にはまりながら、熱心に。〕そう思う？

アリス・ヘミングウェイ：〔笑いながら立ちあがって。〕それに、私が1度あなたに3週間私に言い寄るのを許したことを思うと！

〔ネッドは立ちあがる。〕

〔お手伝いが、手紙類を持って左手から入ってくる。それらをアリス・ヘミングウェイのところへ持ってくる。〕

アリス・ヘミングウェイ：〔手紙類にざっと目を通しながら。〕ネッド、あなたには何も来てないわ。〔自分宛の手紙を2通選んで。〕商人。〔手紙類の残りをお手伝いに渡しながら。〕それから、ロレッタに3通。〔お手伝いに向かって。〕ジョシー、これらはテーブルの上に置いといて。

〔お手伝いは、左正面のテーブルの上に手紙類を置いて、左手に退場。〕

ネッド：〔やきもち気味に。〕 ロレッタは、ずいぶん文通をしているようだな。

アリス・ヘミングウェイ：〔ため息をついて。〕 そうよ、私が未婚の頃にそうだったようにね。

ネッド：でも、彼女のは、家族の手紙だよ。

アリス・ヘミングウェイ：ええ、ビリーからの手紙には気がつかなかったわ。

ネッド：〔力なく。〕 ビリーだって？

アリス・ヘミングウェイ：〔うなずきながら。〕 もちろん、彼のことについてあなたに言ったことがあるでしょ？

ネッド：〔あえぎながら。〕 彼女には恋人がいたの……もう？

アリス・ヘミングウェイ：だったらどうなの？ 19歳よ。

ネッド：〔ためらいながら。〕 この……えー……このビリーって……？

アリス・ヘミングウェイ：〔笑いながら、安心させるようにネッドの腕に手を置きながら。〕 さあ、驚かないで、かわいそうな哲人さん。彼女はもうビリーのことなんか全然愛してなんかいないわ。

〔ロレッタが右から入場。〕

アリス・ヘミングウェイ：〔ロレッタに対し、テーブルのほうに向かってうなずきながら。〕 あなたに手紙が3通来てるわよ。

ロレッタ：〔喜んで。〕 まあ！ ありがとう。

〔ロレッタは、すばやくテーブルに向かって進み寄り、手紙を見て、腰をおろし、手紙を開けて、読みはじめる。〕

ネッド：〔疑い深そうに。〕 でも、ビリーは？

アリス・ヘミングウェイ：どうも彼は、ロレッタのことをすごく愛しているようよ。だから、彼女はここにいるのでしょ。家族は、彼女を田舎町からここへやらねばならなかったの。ビリーは、彼女の生活をみじめにしていたの。2人とも小さな子供…遊び友だちだったってわけ。それにビリーは、そう、しつこいのよ。ロレッタのほうは、かわいそうに、結婚のことを何も知らないの。

それだけのことよ。

ネッド：〔ほっとして。〕 ああ， そうなんだ。

〔アリス・ヘミングウェイは， ゆっくりと右手の出口のほうへ歩きはじめる。ネッドがつき添って， 会話を続けながら。〕

アリス・ヘミングウェイ：〔ロレッタに声をかけて。〕 ロレッタ， 魚釣りに行くの？

〔ロレッタは， 手紙から目を上げ， 首を横に振る。〕

アリス・ヘミングウェイ：〔ネッドに対して。〕 それじゃ， あなたも， なの？

ネッド：行かない， 暖かすぎるから。

アリス・ヘミングウェイ：それじゃ， あなたに向いた所を知ってるわ。

ネッド：どこ？

アリス・ヘミングウェイ：ここよ。〔意味ありげにロレッタのほうを見て。〕 今が， あなたが言うべきことを言う機会よ。

〔アリス・ヘミングウェイは， からかうように笑って， 右手へと出ていく。〕

〔ネッドはためらい， アリスのあとを追おうとするが， ロレッタを見て， 立ち止まる。口ひげをひねって， 考えこむようにロレッタを見つづける。〕

〔ロレッタは， ネッドの存在に気づかず， 手紙を読みつづける。読み終えると， たたんで， 封筒にもどし， 顔を上げると， ネッドを見つづける。〕

ロレッタ：〔ハッと驚いて。〕 まあ！ もう行っちゃったのだと思ってたわ。

ネッド：〔ロレッタのほうに近づきながら。〕 ここにいて会話をすませてしまおうと思ったのさ。

ロレッタ：〔いそいそと， 耳を傾けようとしながら。〕 ええ， あなたは……〔目を落として， 話すのをやめる。〕

ネッド：〔優しく彼女の手を取って。〕 僕がここへ訪ねてやって来たとき， わが運命の人に出会う

ことになるなんて夢にも思わなかった…〔突然、ロレッタの手を放す。〕

〔お手伝いが、盛り皿を持って左手から入場。〕

〔ロレッタは、盛り皿をちらっとのぞくが、何も入っていないのがわかる。そして不審そうにお手伝いを見る。〕

お手伝い：男^{かた}の方がご面会です。名刺はお持ちじゃないです。ビリーだと言うようにおっしゃいました。

ロレッタ：〔びっくりして、うろたえるようなまなざしでネッドに哀訴する。〕 まあ！……ネッド！

ネッド：〔格好よく、礼儀正しく、行こうと立ちあがって。〕 今中座させてくれるなら、自分の望んでいたことをあとで話そう。

ロレッタ：〔うろたえて。〕 どうしましょ？

ネッド：〔ちょっと考えて。〕 彼に会いたくないの？〔ロレッタは、頭を横に振る。〕 じゃあ、会わないで。

ロレッタ：〔ゆっくりと。〕 そんなことできないわ。私たち古い友人だもの。2人は……子供の時から一緒だった。〔お手伝いに対して。〕 お通しして。〔右手に向かって出ていこうとしたネッドに対して。〕 ネッド、行かないで。

〔お手伝いは、左手に退場する。〕

ネッド：〔一瞬ためらいながら。〕 もどって来るよ。

〔ネッドは、右手に退場する。〕

〔ロレッタは、1人舞台に残されて、心の動揺とうろたえを見せる。〕

〔ビリーが左手から入場。一瞬、戸口で立ち止まる。その靴はほこりっぼい。興奮気味。ロレッタを見て、目と顔が輝く。〕

ビリー：〔熱烈に前に踏みだしながら。〕 ロレッタ！

ロレッタ：〔出会ったことにさほど熱をあげているわけでもなく、ゆっくりとビリーのほうに近づく。〕来るって言わなかったでしょ。

〔ビリーはロレッタにキスをしたそうにするが、彼女は単に彼の手を握るのみ。〕

ビリー：〔自分のほこりまみれの靴を見おろしながら。〕駅から歩いてきたんだ。

ロレッタ：知らせてくれたら、馬車を迎えにやっただしょうに。

ビリー：〔抜け目のなさの表情をみせながら。〕もし知らせていたら、僕を来させなかっただろう。

〔ビリーは、注意深そうに舞台を見まわし、それから彼女にキスをしようとする。〕

ロレッタ：〔キスを拒んで。〕おかけにならない？

ビリー：〔なだめるように。〕さあ、1度だけ。〔ロレッタは、首を振り、近寄せない。〕どうして？ 僕たちは、婚約してるんだよ。

ロレッタ：〔きっぱりと。〕まだしてない。してないでしょ。私が町を出てくる前の日に、婚約にケリをつけたでしょ。それに……それに……おかけなさい。

〔ビリーは、椅子の端にすわる。ロレッタは、テーブルのそばに着席する。ビリーは、立ちあがらずに、お互いに面と向かえるまで椅子を前にぐいと引くと、2人の膝が触れあう。彼は、ロレッタに向かって思いを寄せる。彼女は、わずかに椅子を引く。〕

ビリー：〔最高の自信を持って。〕だから、僕は君に会いにきたんだ…もう1度婚約をするために。

〔ビリーは、椅子を前に寄せて、彼女の手を取ろうとする。〕

〔ロレッタは、椅子を後ろに引く。〕

ビリー：〔大きな銀の時計を引き出して、それを見ながら。〕ほら、ロレッタ、僕にはもうなくす時間がないんだ。あと10分でここを出て、あの列車に乗らなきゃならないんだ。だから、君に日を決めてほしいんだ。

ロレッタ：でも、私たち婚約してないわ、ビリー。だから、日の決めようがない。

ビリー：〔自信を持って。〕でも、2人は婚約するよ。〔突然言いだして。〕ああ、ロレッタ、僕が

どんなに苦しんだかわかってくれればいいのだが。あの最初の夜、僕は一睡もしなかった。あれからもずっとあまり眠ってないんだ。〔椅子を前に寄せる。〕夜通し床^{フロア}を歩いてね。〔まじめに。〕ロレッタ、僕はカナリヤを生かしておくほども食べてないんだ。ロレッタ……〔椅子を前に寄せる。〕

ロレッタ：〔椅子を母のように後ろに引いて。〕ビリー、あなたに必要なのは、強壯剤よ。ハスキンス先生に診^みてもらったの？

ビリー：〔時計を見て、急いでいる様子を見せながら。〕ロレッタ、女の子が男にキスをするときは、彼と結婚するつもりだということだよ。

ロレッタ：知ってるわ、ビリー。でも……〔テーブルの上の手紙のほうにちらっと目をやる。〕キャプテン・キット（ロレッタ宛の最初の手紙の送り主；彼女の家族に近い人）は、私にあなたと結婚してほしいなにかないわ。彼は……〔ロレッタは、手紙を取って、開けはじめる。〕

ビリー：キャプテン・キットが何て言ったってかまやしないさ。彼は、君にここにいて君の妹の話相手になってもらいたいさ。君に僕と結婚してほしいないんだ。妹が君を留めておきたいのを知ってるからさ。

ロレッタ：デイジーは、私を留めておきたくなんかないわ。私自身の幸せだけを望んでいるの。彼女は…〔テーブルからもう1通の手紙を取って、それを開けはじめる。〕

ビリー：デイジーが何て言ったってかまやしないさー

ロレッタ：〔テーブルから3通めの手紙を取って、開けはじめる。〕それからマーサ（3通めの手紙の送り主；ビリーの以前の言い寄りをあれこれ知っている）は—

ビリー：〔怒って。〕マーサにしたって、その他の連中にしたって、どいつも忌まいました！

ロレッタ：〔非難するように。〕まあ、ビリーったら！

ビリー：〔防御するように。〕忌まいましたって悪口じゃないし、そうだろ。

〔気まずい間^まが入る。ビリーは、会話の筋道を失い、ぼかんとした表情をする。〕

ビリー：〔急に思いだして。〕キャプテン・キットもデイジーもマーサも、彼らの望むものだって、どうだっていい。問題は、君の望むものだよ？

ロレッタ：〔訴えるように。〕ああ， ビリー， 私みじめなの。

ビリー：〔訴えを無視し， 要点を徹底しようとして。〕大事なのは， 君は僕と結婚したいの？ 〔時計を見る。〕その返事だけしてよ。

ロレッタ：あの列車に乗りそこねないか心配じゃないの？

ビリー：列車なんか忌まいましたい！

ロレッタ：〔非難するように。〕まあ， ビリー！

ビリー：〔ひじょうに怒りっぽく。〕忌まいましたいは， 悪態じゃない。〔悲しそうに。〕そうやって君はいつも僕をはぐらかすんだ。僕は， 列車に乗るためにはるばるここまでやって来たんじゃない。君のために来たんだ。さあ， ひと言だけ答えてよ。僕と結婚したい？

ロレッタ：〔きっぱりと。〕いえ， あなたとは結婚したくない。

ビリー：〔確信を持って。〕でも， やっぱり結婚しなくちゃ。

ロレッタ：〔反抗的に。〕しなくちゃ？

ビリー：〔揺るぎない確信を持って。〕そう言っただろ…しなくちゃ。そうなるのを見越してるよ。

ロレッタ：〔激怒しながら。〕もう子供じゃないわ。私をいじめることはできないわ， ビリー・マーシュ！

ビリー：〔平然と。〕いじめるつもりなんかないよ。君の面目を保とうとしてるんだ。

ロレッタ：〔弱々しく。〕面目？

ビリー：〔うなずきながら。〕そう面目。〔一瞬間を置き， それからしかつめらしく話す。〕ロレッタ， 女性が男性にキスをすると， 結婚しなきゃならないんだ。

ロレッタ：〔ぎょっとして， 力なく。〕しなきゃならない？

ビリー：〔独断的に。〕それが習わしというものさ。

ロレッタ：〔途切れがちに。〕それで， ……女……女性が男とキスをして， 彼と結婚……しないと

きは……？

ビリー：そしたら、^{スキャンダル}物議をかもしね。新聞なんかで見るスキャンダルは皆そこが出どころさ。

〔ビリーは時計を見る。〕

〔ロレッタは黙って絶望。〕

ロレッタ：〔戸惑いながら。〕ビリー、あなたはいい人ね。〔ビリーは、そうだという^{そぶ}素振り。〕なのに私は、とてもよこしまな女。

ビリー：いや、違うよ、ロレッタ。君は知らなかっただけさ。

ロレッタ：〔希望が^{ひらめ}閃いて。〕でも、あなたが初めて私にキスをしたの。

ビリー：そんなことかまやしないさ。君はキスをさせてくれた。

ロレッタ：〔希望が薄れてゆく。〕でも、初めてじゃなかった。

ビリー：でも、あとでそうしたし、そこが大事なんだ。あのおどろの木陰でさせてくれた。させてくれた—

ロレッタ：〔苦悶しながら。〕やめて！ やめて！

ビリー：〔遠慮なく。〕…君がピアノを弾いていたとき、君にキスを。あのピクニックの日にキスをさせてくれた。お休みのキスをさせてくれた時のことなどすべては思いだせない。

ロレッタ：〔涙を流しはじめながら。〕多くても5回よ。

ビリー：〔確信を持って。〕少なくとも8回だよ。

ロレッタ：〔相変わらず涙を流しながら、非難するように。〕あなたは、大丈夫だって言ったでしょ。

ビリー：〔強調して。〕そう、大丈夫だったよ…要するに君が僕と結婚しないって言うまではね。となれば、スキャンダルだ…ただ、まだ誰も知らないけど。もし君が僕と結婚すれば、誰も知ることはないけど。〔時計を見る。〕行かなくちゃ。〔立ちあがる。〕帽子はどこだっけ？

ロレッタ：〔すすり泣きながら。〕ひどいわ。

ビリー：〔賛成して。〕その通り、ひどいさ。だけど1つだけ解決法がある。〔心配そうに帽子を捜しながら。〕

ロレッタ：〔途切れがちに。〕考えないと。お手紙書くわ。〔力なく。〕列車は？ 帽子は、玄関よ。

ビリー：〔時計を見て、急いで彼女にキスしようとするが、何とか握手だけはして、舞台を左手に向かって進みはじめる。〕わかったよ。手紙を書いてちょうだい。明日書いて。〔玄関口で一瞬立ち止まり、しかつめらしく話す。〕いいかいロレッタ、スキヤンダルなんかいないからね。

〔ビリーが退場。〕

〔ロレッタは、そっと泣き悲しみながら椅子にすわる。ゆっくりと涙をふき、椅子から立ちあがり、立ったまま次に何をしたいものか決心がつかないでいる。〕

〔ネッドが、のぞき見しながら、右手から入場。ロレッタが1人で見つて、そっと舞台を彼女のほうへと進む。ネッドが近づくと、彼女はまた涙を流しはじめ、顔を反らそうとする。彼女は、もっと激しく泣き悲しむ。〕

ネッド：〔片腕を彼女の肩を守るように置いて、彼女を自分のほうに引き寄せながら。〕さあ、さあ、可愛い子ちゃん、泣くんじゃないよ。

ロレッタ：〔疲れた子供のように顔を彼の肩に向けて、すすり泣きながら。〕ああ、ネッド。私がいかによこしまかということを知ってくれさえすれば。

ネッド：〔寛大にほほえみながら。〕どうしたんだい、可愛い子ちゃん？ 君の最愛の妹さんが君に手紙を書かなかったのかい？〔ロレッタは頭を横に振る。〕ヘミングウェイが君をいじめていたのかい？〔ロレッタは頭を横に振る。〕それじゃ、きっとあの君の訪問者だったんだね？〔長らく間をおいて、その間ロレッタの泣きようはいっそう激しくなる。〕どうしたのか言ってごらん。そうすれば、僕に何ができるかわかるだろ。〔と言って彼女の髪にそっとキスをする…あまりにその程度が軽いので、彼女はわからない。〕

ロレッタ：〔すすり泣きながら。〕できないわ。私のことを軽蔑するわ。ああ、ネッド、私とっても恥ずかしいわ。

ネッド：〔いぶかしげに笑いながら。〕そんなこと何もかも忘れてしまおう。僕がとても幸せになるかも知れないことを言いたいんだ。僕のたわいもない希望は、君を幸せにもするよ、ロレッタ。

君を愛してるよー

ロレッタ：〔かん高い喜びの叫び声を発し、それからうめきながら。〕遅すぎるわ！

ネッド：〔驚いて。〕遅すぎる？

ロレッタ：〔まだうめきながら。〕ああ、どうして私が？〔ネッドはいくぶん体をこわばらせる。〕私は若すぎたの。あの時は世間を知らなかったの。

ネッド：とにかく、それはどういうことなんだい？

ロレッタ：ああ、私は……彼は……ビリーは……私はよこしまな女だわ、ネッド。あなたは、もう2度と私に話しかけることはないわ。

ネッド：この……えー……このビリー……彼が何をしてきたんだい？

ロレッタ：私は……彼は……私は知らなかったのよ。若すぎたの。仕方がなかったの。ああ、気が狂いそう、気が狂うわ！

〔彼女の肩を守るようにしていたネッドの腕が、弱々しくなる。彼は、そっと彼女を離れ、彼女を大きな椅子にすわらせる。〕

〔ロレッタは顔をおおい隠して、またすすり泣く。〕

ネッド：〔口ひげを激しくねじり、疑わしげに彼女を見、一瞬ためらい、それから椅子を引き寄せ、腰をおろして。〕僕には……僕にはわからないんだ。

ロレッタ：〔声をあげて泣きながら。〕とってもみじめだわ！

ネッド：〔詮索的に。〕どうしてみじめなんだい？

ロレッタ：だって、……彼が……彼が私と結婚したいって。

ネッド：〔顔がたちまち明るくなり、前かがみになって、なだめるように手を彼女の手に置きながら。〕そんなことで女の子がみじめになっちゃいけない。彼を愛していないからというのは、理由にならない……〔突然話をやめて。〕もちろん、彼を愛しじゃないんだろ？〔ロレッタは、頭と両肩を勢いよく振る。〕どうなんだい？

ロレッタ：〔激昂して。〕とんでもない，ビリーなんか愛しちゃいない！ ビリーなんか愛したくない！

ネッド：〔自信を持って。〕愛しちゃいないんだったら，彼が君にプロポーズしたからぐらいで，みじめにならなきゃいけないわけがないだろ。

ロレッタ：〔すすり泣きながら。〕そこが厄介なの。ほんとに愛したかったわ。ああ，死にたいわ。

ネッド：〔悦に入って。〕さあ，いい子だから，君はささいなことでもよくよしてるんだよ。〔両方の手で彼女の両手を握る。〕女性は毎日そういうことをするんだ。君は気持ちを変えた，というか自分の気持ちがわからなかった，というか…不必要にきつい言葉を使えば…男を捨てたというか—

ロレッタ：〔頭を上げて彼を見ながら，口をはさむ。〕捨てた？ まあ，ネッド，もしそれだけのことなら！

ネッド：〔うつろな声。〕それだけ！

〔ネッドの両手が，ゆっくりと彼女の手から離れる。さらに話そうとするかのごとく口を開けるが，気が変わって，黙ったままである。〕

ロレッタ：〔抗議するように。〕でも，彼とは結婚したくないわ！

ネッド：だったら僕ならしないよ。

ロレッタ：でも，私は彼と結婚しなくてはならないわ。

ネッド：彼と結婚しなきゃならないって？〔ロレッタはうなづく。〕それは乱暴な言葉だね。

ロレッタ：〔うなづきながら。〕そうだね。〔彼女の唇は震えているが，抑えようと懸命になり，何とかもっと穏やかに話そうとする。〕私はよこしまな女だわ。ひどくよこしまな女。いかによこしまか誰も知らない……ビリー以外は。

ネッド：〔びくっとして，彼女に奇妙なまなざしを送る。〕彼……ビリーが知ってるの？〔ロレッタはうなづく。ネッドは一瞬考えこむ。〕教えておくれ。洗いざらい言わないといけないよ。

ロレッタ：〔また涙を流しそうになるかのように，弱々しく。〕洗いざらい？

ネッド：〔きっぱりと。〕 そう，洗いざらい。

ロレッタ：〔ためらいながら。〕 そしたら，……あなた……私を……ほんとに……許して……くれる？

ネッド：〔長いため息をつきながら。〕 うん，許すよ。それで。

ロレッタ：誰も私に教えてくれなかった。2人は，一緒にいすぎちゃったのよ。私は，世間のことを何も知らなかった……それに。〔ためらい。〕

ネッド：〔じれったそうに。〕 続けて。

ロレッタ：知ってさえいたら。〔ちょっとためらって。〕

ネッド：〔唇をかみ，自分の両手を握りしめながら。〕 そう，そう。続けるんだ。

ロレッタ：ほとんど毎晩一緒にいたわ。

ネッド：〔容赦なく。〕 ビリーとか？

ロレッタ：ええ，もちろん，ビリーとよ。2人は，一緒にいすぎちゃったのよ……知ってさえいたら……誰も私に教えてくれなかった……私は幼かったのよ……〔泣きくずれる。〕

ネッド：〔激昂して，飛びあがって。〕 悪党め！

ロレッタ：〔頭を上げて。〕 ビリーは悪党じゃないわ。彼は……彼は……いい人よ。

ネッド：〔皮肉たっぷりに。〕 たぶん，次には全部自分が悪かったって言うんだろう。〔ロレッタはうなずく。〕 何だって！

ロレッタ：〔落ち着いて。〕 全部自分が悪かったの。私が決して彼にさせなきゃよかったの。私のせいよ。

ネッド：〔1分ほどのそりのそり行ったり来たりし，彼女の前で立ち止まり，あきらめ顔で話す。〕 わかった。僕はちっとも君を責めたりしないよ，ロレッタ。それに君は，とても正直だったし。そのことは……えー……立派だ。だけど，ビリーが正しく，君は間違ってる。君は結婚しないとイケない。

ロレッタ：〔かすんだ、遠くから響くような声で。〕 ビリーと？

ネッド：そう、ビリーとだ。僕が取りはからってあげよう。彼はどこに住んでるの？ つなぎを取ってあげよう。もし乗らなきゃ、僕は……僕は射殺してやるよ！

ロレッタ：〔驚いて泣き叫びながら。〕 まあ、ネッド、そんなことしないでしょ？

ネッド：〔きびしく。〕 やるよ。

ロレッタ：でも、私はビリーとは結婚したくない。

ネッド：〔きびしく。〕 しなきゃ。それにビリーだってしなきゃ。わかるかい？ それしかないよ。

ロレッタ：ビリーもそう言ったわ。

ネッド：〔誇らしげに。〕 ほら、僕の言う通りだ。

ロレッタ：そしたらもし……もし彼と結婚しなければ……スキャンダルに……なるの？

ネッド：〔穏やかに。〕 そう、スキャンダルになるよ。

ロレッタ：ビリーがそう言ったわ。まあ、私はなんてみじめなんでしょう！

〔ロレッタは、激しく泣きくずれる。〕

〔ネッドは、不機嫌にのそりのそり行ったり来たりするが、時折激しく口ひげをひねる。〕

ロレッタ：〔顔をおおい、ずっとすすり泣いたり声をあげて泣いたりしている。〕 デイジーのもとを離れたくない！ デイジーのもとを離れたくない！ どうしよう？ どうしよう？ どうすればよかったの？ 彼は私に言わなかった。ほかの誰にも私にキスなどしたことがなかった。〔ネッドは、興味ありげに立ち止まって聴こうとする。聴きながら、彼の顔は明るくなる。〕 キスがこんなにひどいものになるなんて……彼が……彼が言うまで夢にも思わなかったわ。今朝私に言ったばかりなの。

ネッド：〔ぶっきらぼうに。〕 そんなことで泣いているのか？

ロレッタ：〔いやいやながら。〕 いーいえ。

ネッド：〔どうにも仕様のない声で、顔からは快活さが消え、またゆっくりと歩いていきだそうとして。〕 それじゃ、どんなことで泣いているんだい？

ロレッタ：だって、私がピリーと結婚しなければならない、ってあなたが言ったんだもの。ピリーとは結婚したくないの。デイジーのもとを離れたくないの。私には何が欲しいのかわからないわ。死にたいわ。

ネッド：〔勇気を出してもうひと頑張りしてみようとして。〕 いいかい、ロレッタ、分別を持たなくちゃ。キスってどういうことだい？ 結局のところ、僕に何もかも話したってわけじゃないだろ。

ロレッタ：私……私は何もかもは話したくないわ。

ネッド：〔命令口調で。〕 話すんだ。

ロレッタ：〔降参して。〕 つまり、それじゃ……話さないと？

ネッド：話すんだ。

ロレッタ：〔つかえつかえしながら。〕 彼は……私は……私たちは……私は彼にさせて、彼は私にキスをしたの。

ネッド：〔必死になって、落ち着こうとして。〕 続けるんだ。

ロレッタ：彼は8回と言うけど、私は5回以上は考えられないわ。

ネッド：わかった、続けるんだ。

ロレッタ：それだけよ。

ネッド：〔まるで容易には信じないで。〕 それだけ？

ロレッタ：〔困惑して。〕 それだけって？

ネッド：〔決まり悪そうに。〕 つまり……その……それ以上悪いことはないの？

ロレッタ：〔困惑して。〕 悪いことって？ まだ何かありそうみたい。ピリーは言った—

ネッド：〔口をはさんで。〕 いつ？

ロレッタ：きょうの午後。ついさっきよ。ビリーが言ったの…… 2人が結婚しなければ…… 私たちの…… 私たちの…… 私たちのキスは恐ろしいものになるって。

ネッド：そのほかに何て言ったの？

ロレッタ：彼の言うのには、女性が男性にキスを許したら、いつだってその男性と結婚するんだって。しないと、恐ろしいことになるって。それが習わしだって言ったわ。私に言わせれば、そんなの悪い、よこしまな習わしで、それで私落ちこんじゃったの。もう2度と幸せになれないわ。私がひどいのはわかってるけど、仕方がないの。私って、生まれつきよこしまだったにちがいないわ。

ネッド：〔上の空でタバコを取り出して、マッチを擦りながら。〕 タバコを吸ってもいいかい？
〔再び正気に返ると、マッチとタバコを投げ捨てて。〕 ごめん。タバコなんか吸いたくないんだ。そんなつもりは全然なかった。つまり……〔ロレッタのほうへ身をかがめて、彼女の両手を取り、それから椅子の肘^{ひじ}かけにすわり、そっと片腕を彼女にまわし、今にもキスをしようとする。〕

ロレッタ：〔ぞっとして、彼をはねつけて。〕 いや！ いや！

ネッド：〔驚いて。〕 どうしたんだい？

ロレッタ：〔動揺して。〕 私を今以上によこしまな女にしたいというの？

ネッド：キスがかい？

ロレッタ：また別のスキャンダルになるわ。そうすれば、2つのスキャンダルになるでしょ。

ネッド：僕の愛する女性とキスをするってことが……スキャンダル？

ロレッタ：ビリーは私を愛しているし、彼はそう言ったわ。

ネッド：ビリーはおどけ者だ……でなきゃ、彼は君同様無邪気なもんさ。

ロレッタ：でも、あなたが自分でそう言ったのよ。

ネッド：〔不意を突かれて。〕 僕が？

ロレッタ：そうよ、自分でそう言ったわ、自分の口から、10分も経たない前に。もう2度とあなたのことを信じないわ。

ネッド：〔横柄に腕を彼女の体に回して、自分のほうに引き寄せながら。〕それに僕だっておどけ者だし、とてもよこしまな男さ。それでも、君は僕を信頼しないとイケない。何も悪いことなんかないさ。

ロレッタ：〔屈しそうになって。〕そしたらスキャンダルは……ないの？

ネッド：スキャンダルなんて馬鹿らしい。ロレッタ、君に僕の妻になってもらいたいんだ。〔と言って心配そうに待つ。〕

〔ジャック・ヘミングウェイが、魚釣りの服装をして、右側の戸口に現われ、じっと見る。〕

ネッド：何とか言ったら。

ロレッタ：もし……私が……

〔アリス・ヘミングウェイが左側の戸口に現われ、じっと見る。〕

ネッド：〔やきもきしながら。〕さあ、言うんだ。

ロレッタ：もしビリーと結婚する必要がないなら。

ネッド：〔叫ぶも同然に。〕僕たち両方とは結婚できないんだ！

ロレッタ：〔悲しげに、両手でネッドをはねつけて。〕それじゃ、ネッド、私はあなたと結婚できないわ。

ネッド：〔^{あぜん}啞然として。〕な一何だって？

ロレッタ：〔悲しげに。〕だって2人ともとは結婚できないんだから。

ネッド：馬鹿ばかしい！

ロレッタ：あなたと結婚したいけど、……

ネッド：君を妨げるものは何もないさ。

ロレッタ：〔悲しそうに確信しながら。〕 まあ、そんなことないわ。私がビリーと結婚しなくちゃならないって、あなた自分で言ったでしょ。もし彼がそうしなければ、あなたは彼をしゃーしゃー射殺するって言ったのよ。

ネッド：〔ロレッタを自分のほうに引き寄せながら。〕 だからと言って……

ロレッタ：〔わずかにネッドを遠ざけて。〕 それに習わしじゃないって……ビリーの……言ったことは？

ネッド：そう、習わしじゃない。さあ、ロレッタ、僕と結婚してくれない？

ロレッタ：〔まじめにふくれっ面をしながら。〕 ネッド、怒らないでね。〔ネッドは彼女を両腕に抱いて、キスをする。彼女は、あえぎながら、ちょっと身を解き放つ。〕 習わしだといいのだけど。だって、今私はネッド、あなたと結婚しなくちゃいけないでしょ？

〔ネッドとロレッタは、もう1度熱いキスをする。〕

〔ジャック・ヘミングウェイがほくそ笑む。〕

〔ネッドとロレッタは、びっくりするが、なおも抱きあいながら、あたりを見まわす。ネッドは、愚かにもアリス・ヘミングウェイを見る。ロレッタは、ジャック・ヘミングウェイを見る。〕

ロレッタ：かまやしないわ。

幕

「よこしまな女」訳者ノート

先に（2015年7月）、「人間の漂流」（“The Human Drift”）を翻訳して“ノート”とともに発表した（『立命館経済学』第64巻・第2号）。そして「その博識ぶり・ユニークな視点・気が遠くなるような過去への遡及の仕方および未来への遠大な見通し等」に驚愕したと記した。これを読まれた日本の方々の反応も大きかった。「ロンドンのものの捉え方に関わる博識と十全さに感服致します」等々。

さて、上記の作品を含む *The Human Drift* (Feb., 1917) 1冊を読んでもみると、全8作中最後から2番めにこの“A Wicked Woman”が唯一Curtain Raiserとして入っていた——最後は“The Birth Mark”と題する寸劇——（その他の6篇はエッセイ）。J・ロンドンが戯曲も！とい

う気持ちとタイトルに対する好奇心も手伝って、翻訳しておこうと考えた。

実は、わがアメリカの父 Russ Kingman の *JACK LONDON: A Definitive Chronology* (1992) によると、1906年11月15日に「\$60 for “A Wicked Woman” 受けとる」とだけ出ている。さらには、*Theft: A Play in Four Acts* (November, 1911) と *The Acorn-Planter: A California Forest Play* (Feb., 1916) が見える。数々の長篇・短篇・ルポ・航海記・放浪記等に加えて、ロンドンも戯曲にも手を染めていたのである。